

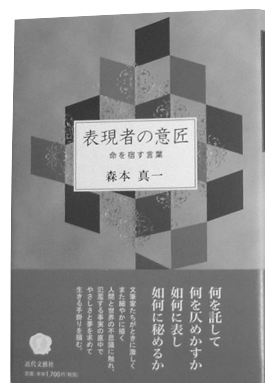
新刊紹介

森本真一著

『表現者の意匠―命を宿す言葉』

白岩 英樹

森本氏をひとことで言い表すならば「型」の人です。型という言葉を使うと、いわゆる四角四面の杓子定規な人間、己の型を他者にまで強いてくるような人間を想像してしまうかもしれません。が、氏のたたずまいはきわめてやわらかく穏やかです。もちろん、ご自身の型を他者へ強要することもありません。研究室を訪ねると、いつも笑顔でありのままを受容しようとしてくださるのです。ぼくが最初に森本氏存在を知ったのは大学三年生のときで、氏のお仕事（高訳書やご著書）を通してでした。シャーウッド・アンダーソンを研究テーマに卒論を書こうとしていたぼくは、入手可能な研究書や翻訳書をかたっぱしから収集し、読みあさっていました。森本氏が翻訳されたシャーウッド・アンダーソン著『檜の茂る丘へ―アメリカ昔語り』が目にとまったのはそのころでした。



2012年5月10日発行
近代文藝社
四六判 252頁
定価 1700円（本体）

さっそく大学の生協で買い求め、夢中で頁を繰りました。訳文そのもの、さらにはあとがき等には、アンダーソン文学に対する氏のやわらかなまなざしが満ちていました。そして、そのまなざしが訳書に確固としたひとすじの光を添えているように思われました。読後、しばし茫然としながらも「ぼくもいつか森本先生のような翻訳のお仕事に取り組みたい」と身の程知らずな夢を抱いたことをいまもはっきりと覚えています。森本氏存在は多くの人生にとって重要な起点であり、遠い雲の上の「憧れ」の人で始まったのです。その後、森本氏は次々とご著書を上梓され、ぼくはその度に書店へ足を運び、こまやかな調査に裏付けられた氏のお仕事に舌を巻くと同時に、深く触発されてきました。そして紆余曲折を経つつも、念願だったアンダーソンの翻訳書出版にこぎ

つけ、憧れの人であった氏へ拙訳書をお送りしたのです。森本氏との交流が始まったのはそのころでした。が、ぼくが大阪の大学院へ進学し、さらにはその後の勤務校も栃木県北部に位置していたため、「生身」の森本氏にはなかなかお会いできず、いたただくお手紙やお仕事を通して氏のありようを妄想する日が続きました。森本氏はいかにして仕事の質と量を高水準に保持しているのか、ぼくも氏のような研究を成し遂げていくためにはどのように日々を送ればよいのか云々、まったく分際をわきまえていない理想でした。

しかし、ご著書や高訳書からだけでも、森本氏の「型」にのっとった研究生活は十分にイメージできました。今回ご紹介させていただくご著書『表現者の意匠―命を宿す言葉』でもその片鱗は十二分に見てとることができます。人間洞察の深度において、ウィリアム・フォークナーと宮本武蔵との同質視を試みている第五章の一節から引用します。

因みに宮本武蔵はもし平和な時代に生きたなら、あるいは哲学者にでもなっていたのではないかと察せられる節がある……表層的な些

事に拘泥せず奥深い真実を果敢に探ること。

これこそ武蔵にとつての極意だったと思える。

(一一一頁)

本書が出版された二〇一二年の春、ぼくは世田谷区内の大学へ異動になり、ようやく生身の森本氏とお話をさせていただく機会に恵まれました。

文学や芸術、教育や人生そのもの、話柄はきわめてバラエティーに富んでいましたが、静かでおだやかながら底に熱いものが感じられる氏の語り口が変わることはありませんでした。

研究室から料理店へ場を移すころ、ぼくの内面にはひとつの確信が生まれていました。森本氏の日常はご自身のお仕事から切り離されることなく、「表層的な些事に拘泥せず奥深い真実を果敢に探ること」から構成されているのだ、と。

森本氏が大学時代に剣道部で副主将を務めていた剣士であることは知っていましたが、学問に対する氏の姿勢はまさに宮本武蔵のような達人を彷彿とさせるものでした。型を「守」り、「破」る段階を経て、そこから「離」れていく。さらには新たな「型」を創り出そうとして孤独に闘ってこられた凄味が、ご著書同様、氏のたたずまいからも感じられました。

本書での格闘の相手は主として「文学作品に見

られる激越な個我の進りと情景の描出や周囲の人の心に去来する諸事を感じし書き残す方策との兼ね合い」(二二八頁)であると氏は述べています。

前著『夢想の旅路―比較文学・比較文化ノート』でその端緒が見られたテーマは、本書でさらなる深まりをもって展開されています。

注目したいのは「性と聖と生」と題された第二章です。章の序盤では大江健三郎や遠藤周作といった日本の文学者が考察されていますが、とりわけ秀逸なのは中盤以降で論じられているD・H・ロレンスとシャーウッド・アンダーソンとの比較です。キム・タウンゼンドが指摘しているように、両作家は作中の「性」の扱いにおいて類似していると考えられてきました。しかし、ともすると表層的になりがちな対比が、本書では両作家の複数の作品をベースにした精緻な論究がおこなわれ、その比較が深層にまで及んでいます。そして「性と聖と生」の各事項を、それぞれから隔離された場所にカテゴライズするのではなく、アンダーソンの生き方になぞらえて、「ときに性によって象徴されるような極めて人間的な要因と聖なるものとの融和を求める努力がアンダーソンにとつての生の充実に繋がったと見ることもできるだろう」(六五頁)という結論に達しています。

ことによると、本書には論の運びがいささか性

急であるように感じられる箇所が見受けられるかもしれません。しかしながら、それは「未知」の世界の扉をノックしつづける研究者につきまとう宿命のようなものだと思います。まだ認識されていない境界にラインを引き、明確だとされているボーダーの両サイドに同質性を見出ししていく。そのような第一線の仕事においては避けがたい副産物と言えるかもしれません。

本書の最終章で、森本氏はアンダーソンの文学的営為に関して次のように書いています。

：アンダーソンは生き方そのものを文学の本質に肉薄させた文人と呼び得るかも知れない。(二一六頁)

この言い方はそのまま氏にあてはめることが可能でしょう。「森本氏は生き方そのものを文学研究の本質に肉薄させた学者と呼び得るかも知れない」。これまで築かれてきた広大かつ深遠な研究成果を礎として、氏の筆先は今後どこへ向かっていくのでしょうか。人文的教養が軽視される現代の潮流に重厚なる一石を投じている論考です。

(しらいわ ひでき 東京都大学講師)